

【壺中】こちゆう

昔、市で薬を売る壺公という老人がいました。その薬は大層評判がよく、多額の収入を得てはほとんどを貧しい人に施していました。毎日壺を店の軒先に掛け、日が暮れると密かにその壺の中に跳びこんで姿を隠していました。あるときその様を目撃した費長房は、壺公に取り入ろうと接近し、壺の中へ連れて行ってもらいました。実は壺公は仙人で、壺の中は広大な仙界だったのです。長房は仙人になろうと壺公に弟子入りしました。

この話は『後漢書』方術伝や『神仙伝』壺公などに見える仙人伝です。

数多い仙人伝説のなかでも最も世に知られた話のひとつでしょう。仙界の入り口が壺という身近な物であるところが人気の理由のひとつなのかもしれません。

茶会でよく見かける一行物に「壺中日月長」があります。

『園悟語録』に見られるこの句は『白氏文集』の「郷路音信断え、山城日月遅し」より想を得たものといわれています。

「壺中天」「壺中天地」「壺中自有佳山水」「壺隠」などバリエーションも豊富です。

世俗を離れた別天地を語るこれらの句は茶掛に相応しいですね。

晋時代の『王子年拾遺記』によれば、仙界の山の姿は、上部は広く麓は狭くちょうど壺を伏せた形をしているそうです。外形のみならず中が空洞であることも壺と仙山は共通しています。

そういえば蓬莱・方丈・瀛州の三神山を蓬壺・方壺・瀛壺ともいいますね。

・それ江の島は崑崙のきを写し 城の垣重なほけれども 蓬莱の勢ひを伝へたる 三壺の形あらたなり。『江島』より この場合の三壺とは三神山のことなのです。

我々日本人は壺といえば陶磁器を連想します。中国では、壺は陶磁器に限らず口が小さく胴の太い器の総称で、たとえば瓢箪も含まれます。

事実『神仙伝』の古書(清時代)で壺公の挿絵の壺は私が見た限り全て瓢箪でした。

瓢箪は無尽蔵に酒や宝など望みの物をもたらす仙人の持物として中国の民話にしばしば登場します。壺・瓢箪は仙界のミニチュアなのです。

(仙界に関心のある方は中野美代子さんの一連の著書をお薦めします)

さて、壺の中の仙界はどのようなところなのでしょうか。

「見えるものはただ仙宮の世界で、楼閣や二重三重の門や、二階建造りの長廊下など。左右には数十人の侍者がいた。」『中国古典文学大系8 神仙伝』平凡社 沢田瑞穂訳

さらに仙界は美酒佳肴が満ち、仙界の一日の長さは俗界の一年にあたるそうです。

さて、費長房は仙人になれたのでしょうか。『神仙伝』では長房は非情な修行に挫折、仙人になりきれず、壺公から護符一卷を伝授され「鬼神の主」に止まります。

俗人が仙人の弟子となり無理難題・非常な修行を課せられる話は数あるようです。

その末、果たせず夢が潰える結末はひとつの型となっているようです。

芥川龍之介の『杜子春』もその類でしょう。

龍之介の小説の原典である『杜子春伝』は唐の『続玄怪録』所収です。

この中で子春は絶対に声を出してはいけないと仙人(道士)から約束させられますが、目の前で自分の子を殺され思わず声を出してしまいます。原典では、このとき仙人は子春の失敗を罵ります。龍之介の『杜子春』ではご承知のとおり、子ではなく両親が責めを受け声を出してしまいます。俗世間に戻された子春に対し、仙人は「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思っていたのだ。」と原典とは全く逆に人間的な心を捨てきれなかった子春を褒めます。このあたりに龍之介の作意があるのでしょうか。

『杜子春伝』によれば、仙人になるには「喜・怒・哀・懼・悪・欲・愛」を捨てなければならぬようです。

茶人も何らかの感情を捨てなければならぬのでしょうか。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~